
A Drowned Body

大橋 秀人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A D r o w n e d B o d y

【Nコード】

N 3 0 6 5 Y

【作者名】

大橋 秀人

【あらすじ】

複数の名前を持ち、複数の男と関係を持っている女性。ある日、当の昔に捨て去ったはずの本当の名前を呼ぶ一通のメールが送られてきた。【毎週土日更新予定】

昔から、フルーツポンチが好きだった。

サイダーに浸かった色とりどりのフルーツ。

炭酸が染み込んだ果肉を口に含んだ瞬間の、あの痛いくらいの爽快
感。

ミカン、メロン、マスカットにピーチ。

とりわけ私はチェリーが好きだった。

【秋穂？】

携帯電話のディスプレイに私の名前が映し出される。

私はその名前を知っている数少ない人間の顔を思い浮かべる。

茎を摘まんで熟したアメリカンチェリーを頬張ると、予想に反して
甘酸っぱい味がした。

昔、サイダーに浸けられていたそれは、今、シャンパンの味が染み
込んでいる。

「それ、好きだね」

シャワーから上がった渡部は髪をバスタオルで拭きながら、ベッドの縁に腰掛ける。

私はその綺麗な小麦色をした上半身を眺めながら微笑みを返す。

背中が隆起して、ホテルの少し暗めの照明に当てられ光沢を得ている。

「チェリー、そんなにおいしい？」

いたるところにキスをしながら渡部はそんなことを聞いてくる。

腰、背中、腕、胸、首筋、耳、頬。

私はくすぐったいキスに笑いながら舌を出す。

その上に、固結びされたチェリーの茎を乗せて。

「へえ、チカにこんな特技、あつたんだ」

渡部は私から視線を逸らさず、

「口の中でヘタを結べる人は、キスが巧いんだってね」

そう言いながら茎を摘まんで綺麗な灰皿の上に載せた。

「試してみる？」

私は挑戦的な目を向ける。

彼は一瞬、微笑んだ後、荒々しく私の唇を貪りはじめた。

A D r o w n e d B o d y 2

思い切りセックスしたら喉が渴いて、気の抜けたシャンパンを一息に飲み干した。

【秋穂だろ？ オレだよ、純也】

ソファに座り携帯電話を開くと、またメールが届いていた。

渡部の去った部屋は静かだ。

窓に雨粒が滴っているが、音はしない。

その気配だけが感じられる。

眼下では夜の街の灯かりが滲んでいる。

暖房が効きすぎて、頭がボーっとしている。

無意味なことを考えたい気分だ。

「アキホ…」

メールの文字を口にしてみる。

私の、最初の名前。

「純也」

その名前を最後に呼んだのは、いつだったろうか。

常に前を向いて生きて、だから過去を振り返ることなんてない。

いつも、今が精一杯だから。

でも今日は、雨が私を守ってくれている気がする。

外界の雑音が遮断され、私の好きなものしかない空間。

その中で少しでも無意味なことを考えてもいいような。

「純也…」

私はもう一度、その人の名前を口にした。

A D r o w n e d B o d y 3

2

週末の夜の、駅の雑踏。

行き交う人、人、人。

すり抜けながら歩く。

手を引かれていると、幼かったときの記憶が蘇る。

「冬美さん、大丈夫？」

無邪気に微笑む俊君の顔が、一瞬、純也のそれと重なる。

【秋穂なら返事をくれないか】

今日もメッセージが届いた。

純也からのメールは、あれからポツポツ届くようになっていた。

私はそれが日に何度も届くようになるのを恐れていた。

でも、それは杞憂だった。

彼からのメールは忘れた頃に届く程度で、私はそれを特に煩わしく

感じずにいられた。

「ここを抜ければ静かなところにでるからね」

優しい俊君は、雑踏を嫌う私を庇いながら歩く。

骨張ったとても大きな手は、私に少しでも安心して与えてくれる。

駅前通りを一本外れると、人通りは疎らになる。

「どこがいい？」

彼はホテルの看板に真剣な眼差しを向ける。

私はその横顔を見て微笑む。

滅多に見られない真剣な顔。

喋らなければいい男。

でも、話すとどこか頭のネジが飛んでいるような男。

私は俊君の、底抜けに明るい性格が好きだ。

いつもヘラヘラして、私の我がままを聞いてくれる。

「ちょっと空いているか見てくるよ」

そう言って彼は行ってしまふ。

私はホテルの門の前で、フラフラとした長身の彼の後姿を見守る。

こんなとき、私は怖くなる。

私は誰なのか。

チ力　　。

冬美さん。

もし、同時に声を掛けられたら、私はどちらに振り向くのだろうか。
渡部がこんな場所に来るはずがないとわかりつつも、そう考えてしまっ

同じ町に住んでいる。

だから、どこかで出くわしても決して不思議ではない。

そのとき私はどちらに振り向くのか…。

「冬美さん」

戻ってきて俊君は悩んでいる。

「どうしよっか」

世界で一番、考えることが苦手だという顔をする。

だから私は、笑って彼の手を引く。

「ううにううよ」

A D r o w n e d B o d y 4

俊君とのセックスはスポーツだ。

時間が許す限り、何度でも。

終わった後は、気持ちのいい汗をかいている。

急いでシャワーを浴びて、服を着て、清算を済ませ部屋を出る。

外に出たときには、少し息切れしていたりして、それが可笑的い。

きちんとゴールできたような爽快感があつて、お互いがお互いの顔を見て笑いあふ。

俊君の笑顔は、底抜けに明るい。

きっと、私が笑ってるから一緒に笑ってくれているんだ。

何も考えず。

私はそんな彼を、愛おしく思う。

「今度、いつ会える」

それは惜別の言葉ではない。

駅のホームまで送ってくれた俊君は、純粋な意味でそう聞いているに違いない。

「連絡する」

とだけ私は言う。

彼は引き止めたりしない。

電車がホームに滑り込むと、笑顔でバイバイする。

彼は私に手を振る。

とてもさっぱりとした表情で。

私はそんな彼のことを好ましく思う。

ドアが閉まり再び始動すると、彼はすぐ踵を返した。

【秋穂じゃないのか？】

夜の電車からは街の灯かりが見下ろせる。

移り行く景色。

家とビルと、少しの緑がある街。

渡部がいる。

俊君がいる。

私は一人じゃない。

だから、メールを返信する必要はない。

ないのだ。

A D r o w n e d B o d y 5

3

【俺は今、吉祥寺に住んでいる】

そんなメールを、井の頭公園を横切りながら読む。

【小さい頃、お前が住んでみたいと言っていた街だ】

思わず立ち止まる。

携帯を持つ手が震える。

同じ街に、純也がいる。

私はすばやく辺りに視線を送る。

ジョギングするマダム。

紙芝居をしているおじさん。

犬の散歩をしているおばさん。

連れ立って歩く大学生　　。

きちんと成長しているのであれば、純也は今、大学生になっているはずだ。

【この街はいいよ。まだ緑が残っていて】

辺りにはそれらしき人物は見取れなかった。

たといいたとしても、私に十年後の彼を見つけることができるのだろうか。

そして彼に、十年後の私を見つけることができるのだろうか。

そんな疑問が浮かんでくる。

【十年前に二人で考えた将来設計通りの道を、俺は今、歩んでいる】

十年前、二人で描いた青写真。

私はそれを、かすかにしか覚えていない。

二人で好き勝手な願望を言い合った、取り留めのない時間。

【計画通りでないのは、お前がいないことだけだ】

私はずっと、住みやすいと評判のこの街に来たかった。

だから図らずも、十年後、結果的にこの街にいる。

計画なんて、正直、忘れていた。

少し可笑しくて、メールを打つ。

【久しぶり。実は私も今、同じ街に住んでいます】

計画通りになりましたね。

そこまで打つと、私はその文面を削除した。

公園を足早に通り抜け、一刻も早くこの場から立ち去りたいという
思いに駆られる。

今更、過去を蒸し返そうとは思わない。

私はずいぶん前に、秋穂という名前を捨ててきたのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3065y/>

A Drowned Body

2011年11月26日16時54分発行